No. 37 (May 2025)

The Gaskell Society of Japan

Newsletter

日本ギャスケル協会ニューズレター

世間と客間とギャスケル ―自分自身でいることの難しさ―

会長　関田　朋子
（日本大学教授）

深緑の季節となり、4月初めにはキャンパス内を右往左往していた新入生も、そろそろ大学に慣れてきたようです。会員の皆さまにおかれましては、ますますご活躍のこととお喜び申し上げます。私が会長を拝命してからこの1年の間、日本ギャスケル協会が会員の皆さまのご理解とご協力に支えられていることをより一層実感しております。心より御礼申し上げます。

さて、私が担当する大学院の授業でここ数年、ギャスケルの作品を扱っています。それで時々思い出すのが、ヴァージニア・ウルフの『自分だけの部屋』です。第4章でウルフは、「世に広く行き渡っているのは男性の価値観」であり、「その価値観は必ずや実人生から小説へと伝えられる」と述べ、批評家がそれぞれの作品を「戦争を扱っているから重要」、「客間にいるご婦人方の気持ちを扱っているからつまらない」と決めつける傾向を批判しています。ウルフは、当時、男性の領域とされていた政治、経済、社会だけではなく、女性が日々の生活のなかで感じる悲喜交々の思いも小説に描く価値があることを訴えているのです。

そのような時代に、意識するしないに関わらず、世間の価値基準に迎合したり、逆に反発したりする女性作家がいたとしても不思議ではありません。ウルフはこうした女性作家を、迎合するにせよ反発するにせよ「他者の意見に影響されて、自分の価値観を変えてしまった」と断じています。そして、彼女らの作品を「腐ったリンゴ」にたとえる一方で、ジェイン・オースティンやエミリー・ブロンテを「才能」と「誠実さ」をもって自らの価値観を貫いた作家として評価しています。そこで私はどうしても言いたくなるのです、「ギャスケルもいます、ギャスケルをお忘れなく」と。

周知のようにギャスケルは社会問題小説家として名高い作家です。その一方で私がギャスケルの作品を読んでウルフを、逆にウルフを読んでギャスケルを思い出すのは、『クランフォード』は当然としてギャスケル作品が、日常生活のエピソードに満ちているためです。たとえば『ルース』第15章で、ルースはブラドショー氏から特別な理由もなく高価な贈り物を受け取ってうろたえます。こういうことは誰にでも起こり得ることで、ルースやベンスン姉弟と同じように現代の私たちも、断れば相手を傷つけ、感謝して受け取れば自分に嘘をつくことになる上に何かの折にはさらに贈り物が届くのではないかと、悩みます。また他の作品同様、『ルース』に描かれた多くの花々は、ギャスケルが日々の生活のなか花々に向けていた優しい眼差しを私たち読者に感じさせます。ギャスケルが友人や家族に宛てた書簡には花の話題を綴ったものがあり、花が生活の一部であったことが分かります。社会問題小説家ギャスケルは日常の細部を大切に描いた作家でもあるのです。

『ルース』は日常生活のなかで人が自分らしくいることの難しさを浮き彫りにした作品です。何につけても強引な夫の意見に付和雷同するブラドショー夫人とは異なり、ルースは母として、一個の人間として生き抜こうとするものの、世間の価値観と自分を貫くことの間で苦しみます。ウルフの言葉を借りれば、ルースの人生も「腐ったリンゴ」にされかねない危うさをはらんでいました。やがてルースの「秘密」は、婦人服の仕立て屋ピアスン夫人の口からその顧客に、そして客間から客間を渡り、ついに多くの人の知るところになります。こうした日常の中のひそひそ話は社会の価値観を形成する大きな力を持ち、それを見つめるギャスケルの筆致には鋭い洞察が感じられます。労使紛争や貧困などの社会問題を、その影響下にある個人の家庭のなかから描いたギャスケルならではのアプローチと言えます。

私たちは、ギャスケルやウルフとは異なる時代に生きています。ジェンダーの多様化が進み、イクメンという言葉も女性政治家という言葉も死語になりつつあります。かつて憶測がひそひそと語られた客間は

匿名で他者の非を断じることもできるSNSに置き換えられ、世界の情勢が食卓のパンの価格に反映され、戦争のオンラインニュースに対して誰もが自分の部屋に居ながらコメントできる時代です。だからこそ声高な多数派の意見に流される傾向は、あるいはギャスケルの時代よりも増しているのかもしれません。「自分でいること」の難しさは、現代が公私の空間の区別をつけ難い時代であるからこそ、今もなおジェンダーの垣根を越えて誰もの大きな課題として残っています。ウルフの『自分だけの部屋』は、物理的な空間であると同時に、自由にものを考え、表現できる心の中の空間でもあります。私はギャスケル作品を読むたびに、そのような空間の必要性を改めて考えさせられます。ただし私の場合、それは完全に「自分だけ」の空間ではなく、ギャスケル協会の皆様とともにある、花々のあふれる空間でありたいと思うのです。

◆◆◆新刊紹介（2024 年度版）◆◆◆　（掲載情報は 2025年 3月15 日までに報告されたものです。）

・木村晶子(共編著)『アン・ブロンテの研究：世紀を超えて』(大阪教育図書、2,200円、2024年1月20日刊)
・原英一（著）『カズオ・イシグロ、沈黙の文学』（北烏山編集室、3,520円、2024年5月31日刊）
・閑田朋子（共著）『アジア・パシフィックの劇場文化』（朝日出版社、2,640円、2024年10月17日刊）
・閑田朋子（共著）『人種と民族を考える十二章――英米文学・文化・教育の視点から』(音羽書房鶴見書店、3,850円、2025年3月25日刊)
・Ohno, Tatsuhiro. *Literature as Science: A Statistical Analysis of the Structures of the Works of Elizabeth Gaskell in Quest of the Absolute Interpretations 1848-59.* (Kadokawa, 3,850円, 2025.3.31)

第 36 回大会レポート

日　時：2024 年 10 月 5 日（土）
日本大学文理学部本館 1 階ラーニングコモンズ
13:00 開会の辞　日本ギャスケル協会会長 閑田朋子（日本大学教授）
総合司会 村上幸大郎（宮崎公立大学准教授）
13:05～13:35　研究発表 1　司会 閑田朋子 （日本大学教授）
「ギャスケルの物語として読む『北と南』― 信仰とやさしさに支えられて」
柏木いずみ（日本大学大学院博士後期課程）
13:35～14:05 研究発表 2　司会　加藤匠　（明治大学兼任講師）
「ギャスケル作品とユニテリアン女性作家の伝統」
太田　裕子（慶応義塾大学非常勤講師）
14:15-15:55 シンポジウム　「19世紀イギリスにおける共感」
司会・パネリスト　松浦愛子（名城大学准教授）
パネリスト　石井明日香（東京学芸大学非常勤講師）
パネリスト　矢嶋瑠莉（千葉工業大学非常勤講師）
16:05-16:35 総会
16:35-16:40 奨励賞表彰式
16:40-17:40 講演　司会　西村美保（名古屋学院大学教授）
「ギャスケルのマンチェスター」
大田　美和（中央大学教授）
17:40-17:45 閉会の辞　日本ギャスケル協会副会長 松本三枝子（愛知県立大学名誉教授）

研究発表 1

「ギャスケルの物語として読む『北と南』― 信仰とやさしさに支えられて」

本発表では、『北と南』において、ギャスケル自身の信仰や育児などの経験がどのように反映されているのか考察した。ギャスケルは、子どもを神から託された存在と考え、祈りによって神の導きを求めながら育児に当たった。また息子との死別を経験したからこそ、子どもに執着することの危うさを認識していた。このような自身の体験から、子に依存する母親がマーガレットやジョンの人格に与える負の影響を描き、母親が信仰を持って祈りつつ生きることの重要性を示したのである。

ギャスケルは困難な時期に、自身が周囲に支えられた経験から、マーガレットを通じて、やさしさとは相手をそのまま受け入れることだと示したのだ。育児は、他者を受け入れるには、そのありのままを注意深

く見ることが大切だと気付く機会となった。さらにギャスケルは、彼女が体験したナッツフォードの弱者支援とマンチェスターの独立心を融合し、“mutually dependent”なやさしさを描いた。これらの考察を通して、『北と南』は、ギャスケルの人生経験が深く埋め込まれた作品であるといえる。（柏木いずみ）

研究発表 2

「ギャスケル作品とユニテリアン女性作家の伝統」

ギャスケルの作品*Ruth*（1853）、“Half a Life-Time Ago”（1855）、*My Lady Ludlow*（1858）には、社会でその実力を発揮して働く女性が描かれ、社会問題に対する批判や改革の必要性、そして女子教育の重要性を共有した18世紀末期からのユニテリアン女性作家の影響が認められる。これらの女性作家の先駆者アナ・バーボルド（1743-1825）や、ユニテリアン主義に深く影響を受けたメアリー・ウルストンクラフト（1759-97）の児童文学を含む作品とギャスケルの作品との関連性を考察すると、ギャスケルはウルストンクラフトの急進的な思想に基づく男女同権を実現した社会よりも、バーボルドの提唱した男女の役割を認め合い相互に愛情を深める社会を理想としたことが明らかである。更に、ギャスケルが描く女性の活躍の根幹には、バーボルドら1790年代のユニテリアンが保持していた、愛情が慈善的な行動を促し、他者の幸福のために社会共通の善を行いたいという欲望を生み出すというスコットランド啓蒙主義的思想も読み取れる。　（太田裕子）

シンポジウム

「19世紀イギリスにおける共感」

ギャスケル作品における共感が、社会的・個人的変革をどのように促すかを探った。共感が作品内で果たす役割や歴史的背景、影響を解明し、社会課題や倫理的問題への応用可能性を考察した。ギャスケル作品を通じて、共感が社会的葛藤や性別役割にいかに寄与するかを問い直し、その重要性を再評価する試みを行った。

『北と南』における共感の役割：19世紀イギリスの共感と現代日本社会への示唆」

2026年刊行予定のギャスケル『北と南』の新訳刊行を見据え、同作品を基に分析を行い、19世紀イギリスにおける共感の文化的・社会的意義を再評価した。まず、「sympathy, compassion, empathy」の3つの語彙を定義し、20世紀初頭に登場した「empathy」は現代日本における共感の概念と位置づけた。一方で、Rae Greinerが提唱する「共感的写実主義（sympathetic realism）」という視点から『北と南』における共感の事例を分析し、アダム・スミスの『道徳感情論』を参照しつつ、19世紀イギリス文学における共感（sympathy）の仕組みを考察した。さらに、『北と南』の主人公マーガレットが家庭内で担う感情ケア（いわゆる感情労働）の意義に注目した。最後に、感情史における共感の共同体という枠組みに着目し、ギャスケル作品を出発点とすることで、現代日本社会における共感のあり方を分析する可能性を示した。（松浦愛子）

「共感からケアへ―『ルース』における「自分だけの部屋」」

本発表では、Elizabeth Gaskellの*Ruth*において、ヒロインRuthが向ける/Ruthに向けられる共感とケアの可能性を、「自分だけの部屋」をキーワードに論じた。Gaskellは他の作品においても、立場や身分の違う相手を理解することが、共感やケアにどうつながるかを論じているが、*Ruth*においても、相手への共感とケア、それが救済につながる/つながらないが描かれている。偶然であっても、また苦しい時間であっても一人だけの時間を過ごすことで、相手への共感につながる場合もある。Ruthは相手からの共感とケアを得て、自分の感情に身を任せることにより、相手を理解し、共感することを学ぶのである。「自分だけの部屋」は引きこもり、他人とのつながりを断つ場所ではなく、立場の異なる相手を理解し、ケアを与えることにつながる場である。また、共感が救済へとつながらない場合や、排他的な共感も描かれる。以上の観点から、最後には結末でRuthが死ぬことの意味と、『北と南』へとつながる可能性を論じた。（石井明日香）

「「家庭の天使」像からの脱却――ギャスケルの持つ女性の多様な生き方への共感」

『クランフォード』、『ルース』、『北と南』と書簡から、ギャスケルの持つ女性の多様な生き方への共感についての考察を行った。初めに、余った女、堕ちた女、男勝りの女の性質を挙げ、当時の社会から見たそれらの女性像について述べた。次に、それらの女性とギャスケルとの関わりについて、『クランフォード』、『ルース』、『北と南』の女性登場人物のモデルとされる従妹のメアリ・ホランドとルーシー・ホラン

ド、ギャスケルが刑務所から救い出したお針子のパスリ、『カサンドラ』を書いたフローレンス・ナイチンゲールとの交流関係から考察した。最後に、上記の三作品とギャスケルの書簡から、ギャスケルの余った女、堕ちた女、男勝りの女の描かれ方を考察し、ギャスケルは「家庭の天使」としての生き方に縛られない女性の多様な生き方に共感を示していると論じた。また、ヴィクトリア朝の女性の生き方の変遷は現代日本女性の生き方の変化にも通じるところがあり、ヴィクトリア朝文学への共感は日本女性の生き方や社会の価値観の変化を考える上でも大いなる指針となると結論づけた。(矢嶋瑠莉)

講演

「ギャスケルのマンチェスター」

皆さんを現代のマンチェスターにお連れして、その魅力を共有したいという思いで講演しました。62枚の写真をお見せしながら、あらゆる差異の共存する町、運河の町の魅力を語り、ギャスケルの時代と同様に、働くことが美徳であること、過去を振り返り、より良い社会を一緒に作るという強い意識と活発な活動を、美術館や博物館で見ることができることをお伝えしました。マンチェスターゆかりの人物を紹介しました。英語圏最初の公共図書館を作ったハンフリー・チェタム。ジョン・ライランズ図書館を作ったキューバ出身のエンリケタ・ライランズ。1933年に英仏海峡を泳いで横断した女性サニー・ローリー。マンチェスター・メトロポリタン大学で教える前桂冠詩人キャロル・アン・ダフィ。卒業祝のバナーにひときわ力強い詩が引用されていたロンドン・オリンピックの公式詩人レム・シシー。ヘイトスピーチと闘う、ネイチャーライター、アニタ・セティ。私が到着後すぐにこの町が気に入ったことは、私が昨年５月にRead Manchester's Poetry Placeに応募してMay's Winners３名のうちの一人に選ばれた詩“A Gatekeeper”に表れています。（大田美和）

大会レポート

第36回大会は日本大学文理学部において、村上幸大郎氏総合司会のもと、開催校をお引き受け下さった閑田朋子会長の開会の辞に始まった。今回の参加者は28名であった。

一人目の研究発表は、閑田朋子氏の司会進行で柏木いずみ氏の「ギャスケルの物語として読む『北と南』―信仰とやさしさに支えられて」であった。信仰を精神的な基盤に置きつつ、困っている人に手を差し伸べる優しさは、ソーントン母子とギャスケル自身に共通するという温かい眼差しの主張であった。二人目の発表は太田裕子氏による「ギャスケル作品とユニテリアン女性作家の伝統」、司会は加藤匠氏であった。18世紀末から19世紀にかけてのユニテリアン主義の女性作家の作品をギャスケルの作品との関連性から紐解くという大変興味深いご発表であった。

シンポジウムのタイトルは「19世紀イギリスにおける共感」で、松浦愛子氏司会のもと、「共感」をキーワードに松浦愛子氏、石井明日香氏、矢嶋瑠莉氏がそれぞれの視点から論じた。松浦氏のタイトルは「『北と南』における共感の役割：19世紀イギリスの共感と現代日本社会への示唆」で、社会階層や地域、思想を超えて、『北と南』における共感がいかに現代社会においても機能しているかを考察したものだった。石井氏のタイトルは「共感からケアへ―『ルース』における「自分だけの部屋」」で、登場人物は必ずしも「自分だけの部屋」を持つわけではないが、共感を可能にする上で重要な役割を果たしているというご発表であった。矢嶋氏による「「家庭の天使」像からの脱却――ギャスケルの持つ女性の多様な生き方への共感」と題した発表は、長編小説に描かれている主人公、独立した女性や未婚の母、男勝りな女性に焦点を当て、ギャスケルの女性登場人物に対する共感について論じたものだった。「共感」の意味のもつ奥深さを印象付けるシンポジウムであった。

総会に続き、奨励賞授与式が行われ、中越亜理紗氏が表彰された。日本ギャスケル協会ではお二人目の受賞者となった。今後のご活躍を期待したい。

大田美和氏は、西村美保氏司会のもと、ご講演「ギャスケルのマンチェスター」の中で、ご自身がマンチェスターに滞在した3か月間のご経験を、歴史的に文化的に古今のマンチェスターを比較しながら魅力満載にお話し下さった。そして最後に松本三枝子氏の閉会の辞とともに会は締めくくられた。

懇親会は、19名が参加し、「居酒屋たつみ」にて会の余韻に浸りながら、隣室の賑やかな日大生にパワーをもらいながら、楽しいひと時を過ごした。当日は雨模様のお天気であったが、大会は大変盛況であった。ひとえに開催校の閑田会長を筆頭に、役員の先生方、開催校の方々のご尽力によるものであり、また会員同士の温かな雰囲気も一役を担っていた。　（遠藤花子）

2024年度役員会報告（2024年9月24日（火）20：00～21：50　オンラインZoom：2024年9月28日（土）～2025年1月11日（土）メール稟議）

① 現在の会員数は 69 名。
② 第 36 回大会は 2024 年 10 月 5 日（土）に日本大学文理学部にて開催。同学部より補助金が交付される。2025 年度は岩手県立大学、2026 年度は名城大学を予定。
③ 19 世紀イギリス文学合同研究会は 2025 年 12 月 6 日（土）に西南学院大学で開催予定。ギャスケル協会からの研究発表者は濱奈々恵先生、シンポジウム登壇者は江澤美月先生。
④ 『ニューズレター』第 36 号が発行された。
⑤ 『ギャスケル論集』第 34 号が発行された。昨年度大会講演に基づく論文 1 本、投稿論文 5 本（うち奨励賞受賞 1 本）、書評 1 本。1 年に複数奨励賞授与を可とすることが確認された。
⑥ 共訳『北と南』は、松本三枝子先生、金山亮太先生、大田美和先生による監訳作業終了後に大野龍浩先生が組版し、2026 年度内に出版予定。
⑦ 2023 年度会計報告及び 2024 年度予算案が承認された。
⑧ 会則第 7 条改定により、名誉会長及び名誉会員制度が廃止された。

総会報告（2024年10月5日（土）日本大学文理学部　対面）
① 2023 年度会計報告、2024 年度予算案が承認された。
② 役員会報告の通り、会則第 7 条が改定された。

奨励賞報告（2024年10月5日（土）日本大学文理学部　対面）
① 総会後に中越亜理紗氏に奨励賞（受賞論文：“ ‘China’s Earth and Indian Leaf’: Oriental Commodities in Elizabeth Gaskell’s Condition-of-England Novels”）が授与された。

事務局報告(2023年度)

2023年度(2023.4.1-2024.3.31)日本ギャスケル協会　会計報告

2023 年度一般会計予算

収入		支出	
前年度繰越金	1,231,635	通信費	50,000
年会費（含　英国）	454,000	大会費	150,000
		事務費	20,000
		印刷費	180,000
		19 世紀イギリス合同研究会費	20,000
		英国協会費	98,000
		（小計）	518,000
		次年度繰越金	1,167,635
合計	1,685,635		1,685,635

2023 年度一般会計決算

収入			支出	
		内訳		
年会費	346,000	340,000（2023 年度一般）	通信費	33,254
		6,000（2023 年度学生）	事務費	24,107
寄付	5,000	足立万寿子先生より	印刷費	138,105

懇親会費	117,000	6,500×18 名	19 世紀イギリス合同研究会費	26,450
補助金	50,000	同志社大学より	大会費*	195,051
（小計）	518,000		（小計）	416,967
英国協会	82,000	80,000（2023 年度一般） 2,000（2023 年度学生）	英国協会費	82,000
（小計）	82,000		（小計）	82,000
前年度繰越金	1,231,635		次年度繰越金	1,332,668
合計	1,831,635		合計	1,831,635

2024年度日本ギャスケル協会予算案（2024年4月1日～2025年3月31日）

2024 年度一般会計予算案

収入		支出	
前年度繰越金	1,332,668	通信費	50,000
年会費（含 英国協会）	399,000	大会費	150,000
大会補助金 （日本大学）	50,000	印刷費	180,000
		事務費	20,000
		英国協会費	66,000
		(小計)	466,000
		次年度繰越金	1,315,668
合計	1,781,668	合計	1,781,668

日本ギャスケル協会第37回大会予告(仮プログラム)

2025年10月4日（土） 於・ 岩手県立大学（アイーナキャンパス）

●開会の辞 13:00-13:05　日本ギャスケル協会会長： 閑田朋子（日本大学教授）
総合司会：　矢次　綾（松山大学教授）

●研究発表1 13:05-13:35 「*The Grey Woman*における階級・恐怖・暴力」
司会：木村晶子（元早稲田大学教授）
大前義幸（岩手県立大学准教授）

●シンポジウム 13:45-15:25 「ギャスケル作品にみるケア」
司会：パネリスト　遠藤花子（日本赤十字看護大学准教授）
パネリスト　星　志乃（東京農業大学助教）
パネリスト　木村正子（岐阜県立看護大学准教授）

●総会 15:35～16:05

●講演 16:05～17:05 「女だけの世界−『クランフォード』、『妻たちと娘たち』再訪」
司会:　鈴木美津子（東北大学名誉教授）
原　英一（東北大学名誉教授）

●閉会の辞 17:05-17:10　日本ギャスケル協会副会長 松本三枝子（愛知県立大学名誉教授）

●懇親会 17:30～　ももどり駅前食堂 予算4,000円程度

*仮プログラムの時間は後日調整される可能性があることをご了承ください。

◆◆◆研究会予定◆◆◆

ギャスケル作品の読後感を自由に語り合い鑑賞する研究会です。今年度は以下の作品を取り上げる予定です。

2025年
7月13日 *Sylvia's Lovers* Chs. 1-4 大前義幸
9月7日 *Sylvia's Lovers* Chs. 5-8 長浜麻里子
11月9日 *Sylvia's Lovers* Chs. 9-12 宇田朋子

2026年
1月 11日 *Sylvia's Lovers* Chs. 13-16 鈴江璋子
3月 8日 *Sylvia's Lovers* Chs. 17-20 木村正子
5月 10日 *Sylvia's Lovers* Chs. 21-24 矢嶋瑠莉

日　時：奇数月　第 2 日曜日　午後 2 時～午後 4 時

※ 原則として Zoom による開催。日程等に変更がある場合は、日本ギャスケル協会 HP に掲載いたしますので、新着情報をお確かめ下さい。皆様のご参加をお持ち申し上げます。

編集後記

事務局の早川友里子先生、パソコンにお詳しい松岡光治先生、研究会予定をお知らせ下さった大前義幸先生はじめ多くの先生方のお力をお借りして、どうにか三度目のNLを完成させることが出来ました。心がほっと和むような温かい巻頭エッセイを寄せて下さった閑田朋子先生、大会レポートをご執筆下さった遠藤花子先生、さらにご発表やご講演の原稿をお寄せ頂きました先生方にも御礼を申し上げます。至らない編集ばかりで大変ご迷惑をおかけしましたが、これまで本当にありがとうございました。（編集　桐山恵子）

発行：　日本ギャスケル協会
〒102－8357 東京都千代田区三番町12番地
大妻女子大学文学部英語英文学科
早川友里子研究室
URL: http://www.gaskell.jp/
Email:yurikohayakawa@otsuma.ac.jp
発行日： 2025年 5 月29日